

レポ ー ト



講座「剣豪の人間形成」の企画案

耕雲塾理事長・宏道会師範 佐瀬 長和

はじめに

子供の時から現在まで、剣道を修練してきたものとして、私は生涯学習や大学開放講座で、剣道の実技だけでなく、剣の道を究めてきた諸先輩の生き方に学ぶような講座がもっと広く普及すればと考えてきました。その一例として、ここでは、「剣豪の人間形成」というテーマで、現代人にとっての生き方学習の講座を考えて見たいと思います。

1 人間形成とは

まず始めに、人間形成という言葉が初めて聞かれる方も多いと思いますので、それについて私の考えるところを述べておきます。人間形成とは、文字通り人間を形づくることであります。では、人間を形づくるとはどういうことかといいますと、人間は赤ん坊として生まれ、少しずつ成長していく訳であります。この成長過程で必要なことは、知育、体育、徳育(心の教育)の三育を如何に正しく身に付けるかであります。現代の学校教育や家庭教育が目指しているところは、まさしくこの三育であります。しかしながら、知育、体育に関しては確かりとした教育方針が出来ていると思いますが、徳育に関してはその教育方法がはっきりと掴めている親や教育者が少ないのが現実ではないでしょうか。たとえば、それは、新聞報道によく見るように、高学歴でありながら、さまざまな不祥事を生み出していることに表れています。この徳育をみがくことが人間形成の肝要なところであると考えます。

徳育によって人間形成をするということは、道德教育の項目を知識として教えるのではなく、実践的に「心を制御する力」を身につけさせることでなければなりません。これについては、小学校から大学までの全ての教育課程を通じて、現状では残念ながら期待はしても不可能に近い、無い物ねだりの段階といわざるを得ないところではあります。

沢庵和尚の「心こそ 心迷わす心なれ 心に心 心ゆるすな」という和歌はよく知られていることところですが、この「ころころする」心を「制御する力」を付ける方途を、古来から人々は考えてきました。人間の精神文化の歴史を見ても判るように、それには色々な道があります。即ち、本当の宗教による人間形成においては人間の正しい生き方を説いているのはもちろんのことですが、それ以外にも「道」という名前が付く諸芸芸道や諸武道にそれを見ることができます。ここにおいては、それらの一つである剣道のジャンルでの人間形成、すなわち「心

を制御する力」について、古来剣豪と云われる人たちを事例に取り上げ、剣豪とまでいわれるようになった人々が、単に術としての剣だけでなく、いかにして精神的な徳目を修めていったかを学ぶことは、私たちにとっても有益なことであるに違いありません。

2 剣豪の人間形成を学ぶ意味

剣豪の人間形成を学ぶことで、現代の人々にどういう意味があるかと申しますと、経営者、学生、子育ての女性、生き方に迷っている人、等々にとって、先ず信頼される人物になれることであり、相手と一体になって、対立しないで生きられるところで在ります。我を殺すことによって、本当の人生を味わうことが出来るのです。子育ての女性にとっては、子供と対立せず、子供と一体となって、日常を生きていけるということです、経営者にとっては、社員に信頼され、取引先にも信頼される人物になれるということ、学生であれば、集中力が付き勉強がしっかり出来るようになるということです。生まれて今日までずっと相対の世界に生きてきたわけですが、道を追究する人間形成で、相対を絶して、絶対の世界に入れることになります。

これを換言しますと、今をそのまま享受して、今を生きることが出来る。過去のことを引きずらず、未来を憂えず、今現在を正しく、楽しく、仲良く生きれることになります。このことは、西郷隆盛がその遺訓で、「過を改むるには、自ら過てりと思はば可なり。其の事をば棄て顧みずして、直ちに一步踏み出づべし」と述べていることに通じます。

剣豪といわれる方々の素晴らしいところは、強くなるという結果を求めて研鑽する中で、人間形成すなわち「心を制御する力」を身につけているという点であります。逆に言いますと、それが出来ていない剣術のうまさ強さだけでは剣豪として歴史に残っていないと云うことでもあります。剣豪は、日々の剣道の稽古を通じて、また真剣勝負を通じて、まさしく「命を捨てる」修行に取り組んきた人たちです。この「命を捨てる」ことこそが、「心を制御する力」の究極の処になっているのであります。そして、名だたる剣豪の多くが、剣道を高め深めるためにどのような精神的な修行をしたかという、多くの剣豪は人間形成を禅に求め、禅の修行を積んで本当に強い剣豪になっていること、すなわち「剣禅一味」であったことが注目されます。

では、「命を捨てる」という事はどういうことかと申しますと、当然のことですが肉体的に死ぬということではありません、今までの相対を絶して、絶対界に悟入するということでもあります。絶対界に悟入すれば、生もなく死もなく捉われるところがなくなることになり、それが「命を捨てる」ということに成るのです。

公開講座等では、剣豪の「剣禅一味」の境涯に至る過程を人間形成の観点から学習していくことで、現代人の生き方にも役立つことがたくさんあるのです。

3 取り上げたい剣豪の人間形成

剣豪のうち、最初に取り上げたい方が、伊藤一刀斎影久(1550年生)であります。この方は、一刀流の創始者であります。一芸に秀でた人物は、人を見る目も誠に正しいものを持っております。

晩年免許を次に譲る時の経緯があります。自分の下に、二人の人物、すなわち一人は、小野善鬼、もう一人は、神子上典善であり、どちらに一刀流を継がせるか悩みました。剣術の腕は、小野善鬼が一枚上手の様でしたが、一刀齋は、人物が出来ていないとみて、神子上典善に継がせる決心をしますが、何となくそれを感じた、小野善鬼は、免許皆伝の巻物を盗んで逃走します。一刀齋と神子上典善が追いかけたが、大きな甕の中に小野善鬼は逃げ込みました。

神子上典善が甕のふたを取ろうと近づいたとき、一刀齋は、ふたは取るな、取れば自分が斬られるので、この時持っていた甕割の刀を神子上典善に渡し、甕ごと真二つにする様に云い、典善はそのまま真二つにした。小野善鬼は、免許皆伝の巻物を口にくわえたまま、是を離さなかった、それを見た一刀齋は、一旦小野善鬼にも免許皆伝を与えると、ポロリと口から巻物を離したとの逸話が伝わっております。神子上典善はその後研鑽を重ね、小野派一刀流として今日まで続いているのです。伊藤一刀齋影久の人を見る目の正しさが如実に表れております。残っている文献が少ないので詳しい経歴は解りませんが、晩年 41 歳から仏門に身を投じ余生を過ごしました。一刀流の仮字目録を以下に記しておきます。

仮字目録

敵をただ 打つと思ふな 身をまもれ、おのづからもる しづがやの月
是のみと 思ひきはめそ 幾数も 上に上あり 吹毛の剣
世はひろし 事(わざ)事(わざ)事はつきせじ さりとては わがしるばかり 有りと思ふな

次に有名な剣豪は、宮本武蔵であります、この方は本も多く出版されておりますので特に申すまではありませんが、晩年泰勝寺の春山和尚について、本格の禅の修行をされ、「二天道楽」の法号を与えられます。それにちなみ自身の流派を「二天一流」と名付けました。後世に素晴らしい武道での生き方の書『五輪書』が残されているのは、有り難いことです。

武蔵の人生観は、独行道に現れているので、以下に幾つかを紹介しておきます。

- ・道においては、死をいとはずおもふ
- ・いつれの道にも、別れをかなしませず
- ・我、ことにおいて後悔せず
- ・仏神は貴し、仏神を頼まず
- ・常に兵法の道をはなれず

その他、針ヶ谷夕雲は、虎伯和尚について禅の修行をされて、相抜きの妙技を編み出しております。これは今までの相打ちよりもっと高い境涯からの技であり、お互いが傷一つ負わずに、刀を納める技であり、本当の技量がないと出来ない技です。無住心剣術(夕雲流)と名付け一世を風靡しました。剣道の極意を次のように詠んでいます。

- ・ 剣道は我も打たれず人打たず、無事に行くこそ妙とこそしれ
- ・ うち合す剣のもとに迷いなく 身を捨ててこそ生くる道あれ

また、白井亨は、寺田五郎衛門が先生であり、白井亨は天真一刀流を「鍊丹の法」によって、寺田五郎衛門から免許皆伝を受けています。この「鍊丹の法」とは、白隠禅師の著書「夜船閑話」の中にある観法であり、数息観であります。彼は、天真白井流兵法を立ち上げ、「六つの伝」を初心者に教えました。

- ・「忘れて捨てるもの3つ」 敵の体、我が体、我が持ちたる剣
- ・「覚えて修するもの3つ」 真空、丹田、赫機（ノビ）

島田虎之助は、一刀斎堀十郎左衛門の道場に入門して剣を学び、13歳の時には、筑前聖福寺仙厓和尚について、禅をされました。次のような、有名な言葉があります。

- ・「剣は心なり 心正しからざれば 剣また正しからず 剣を学ばんと欲すれば 先ず心より学ぶべし」
- ・「剣術の要処は人を撃つのが目的でなく、自分の心に勝ちを考えず、相手の心を奪って 剣上に置く様にすれば、自然に敵を打つことが出来る」
- ・「世の剣士たちに皆、孟子の書を熟読させて、その真理を剣に応用すれば、外に何の修行もいらぬ」

以上は、島田虎之助の剣の極意である『剣心一致』に残されていることです。

このほかにも、男谷精一郎(直心影流)、榊原健吉(直心影流)、平山行蔵(直心影流)、千葉周作(北辰一刀流)、山岡鉄舟(無刀流)、加藤完治(直心影流)、各先生方を取り上げ、彼らの武道に対する純真な心が訴えていることを紹介し、私たちの生き方の糧にしたいと思っております。

4 小川 忠太郎

最後に、私自身が、小学生の時から指導を受けて参りました、小川忠太郎範士9段という先生を紹介したいと思っております。小川先生の経歴は下にあげておきましたが、剣禅一味に生きられた人生で、直接日々稽古を受けた私たちは、剣道だけでなく、生き方もまた教えられました。先生は、無刀流免許皆伝・小野派一刀流免許皆伝で、警視庁剣道の最高師範を務められました。お先生の言葉に、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」というのがありますが、そのことを稽古だけでなく生活でも示されました。

小川先生の剣道の基本は、真面一本 本当にこの面が打てれば、いつ死んでも良い、「命を捨てる」であります。段取り、真剣、後始末を大切にされ、決して人に防具を持たせる事無く、自分で担いで稽古場に向かわれました。「正しい面、人生は此れです」とよく言われ意味が解りませんでした。最近には自分に、人生に本当に親切に生きるということと思っております。また、先生からは、「人生で本当に窮した時は、剣道と禅が役に立つ」と云われたこともあります。是は、悲しい時は徹底悲しむ、楽しい時は徹底楽しむ、苦しい時は徹底苦しむ、という事だと思っております。正に窮すれば通ずということで、今現在を生きるというのは、そういうことなのだと思われました。

最後に先生の辞世の句を披露しておきましょう。

わが胸に 剣道理念抱きしめて 死にゆく今日ぞ 楽しかりける

小川忠太郎先生の経歴

明治 34 年、熊谷市で生を受ける。

大正 2 年、12 歳の時、直心影流七尾菊太郎先生に師事し、尚道館で稽古する。熊谷農業学校に進学し、
吉岡道徳先生に指導を受ける。卒業後上京 高野佐三郎先生の修道学院に入門。

大正 9-11 年、兵役。

大正 12 年、国士館高等部に入学。その間、中山博道先生にも教を請う。

齋村五郎先生の指導を受ける。支那事変勃発で召集され、上海、中国大陸と各地を転戦。

昭和 5 年、両忘協会・両忘庵釈宗活老師に入門、禅の修行を始める。

昭和 7 年、人間禅教団で見性され、刀耕の道号を授与される。

昭和 16 年、国士館専門学校剣道主任教授に就任。

昭和 24 年、人間禅教団耕雲庵立田英山老師に師事。

昭和 27 年、人間禅教団一等布教師に任命される。

昭和 28 年、警視庁剣道師範就任。

昭和 31 年、人間禅教団識大級に進級 無得庵の庵号授与される。

昭和 45 年、警視庁名誉師範就任。

平成 4 年 1 月 29 日、帰寂

おわりに

人間はどの時代を生きてきた人でも、それぞれ悩み、考え、決断し、自分の人生を切り開いてきました。度に発達した社会に生きる現代人も状況はまったく同じです。そうした悩みや試練も多き人生を如何に正しく全うして生きるかということは難しいことですが、その我が国の剣道が生み出した精神を学ぶことで人生の道も開けます。古人の剣豪の人間形成、エピソード、剣の特徴(実演)、珠玉の言葉、そして生き方から、現代的な課題の解決法を見い出す、次ぎに剣書学習へと向かうような講座が盛んになることを望むものです。



小川 忠太郎 氏



宏 道 会

参考文献

- 今村 嘉雄『武道歌撰集』第一書房、1989 年。
加藤 完治『武道の研究』日本農業実践学園加藤完治全集刊行会、1996 年。
立田 英山『人間形成と禅』人間禅教団、1989 年。
直木 三十五『日本剣豪列伝』河出文庫、1986 年。
宮本 武蔵 著、佐藤 正英 校注・訳『五輪書』ちくま学芸文庫、2009 年。
山田 次郎吉『日本剣道史』東京商科大学剣道部、1925 年。
渡邊 五郎三郎『南洲翁遺訓の人間学』致知出版社、2005 年。
剣道九段範士 小川 忠太郎 (<http://www.youtube.com/watch?v=HUxbu9hAsik>)
-

佐瀬 長和 (させ・たけかず)

1949 年、北海道夕張市生まれ。流通経済大学流通経済学部卒。平田倉庫(株)勤務、木場の材木問屋で建設業に携わり、その後建設会社を起業、現在昭電設備(株)勤務。7 歳から宏道会で剣道を始め小川忠太郎先生(剣道範士9 段・警視庁名誉師範・小野派一刀流免許皆伝)に師事、小川先生没後長野拓郎先生(小野派一刀流免許皆伝)に師事し、2007 年長野拓郎先生より小野派一刀流免許皆伝を受く。現在宏道会師範。全日本大学開放推進機構法人会員。